海色の瞳

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海色の瞳

【Ｎコード】
Ｎ０６７７Ｂ

【作者名】
徳次郎

【あらすじ】
底知れぬ深い海のように、寂しく澄んだ彼女の瞳は、瑠璃色ではなく、海色だった・・・・・・高校三年生の皆川ヒロトは、夏休みが終わって間もない頃、友達の病院に見舞いに行った際に一人の女性と出会う。藤島綾香は市内最高位の県立女子高に通う二年生だったが、二年に進級した春からずっと入院していた。長い入院生活を送りながらも明るく笑う、色白の彼女の笑顔にヒロトは心を吸い込まれるように引かれる。しかし、無邪気に笑う彼女の笑顔とは裏腹に病状は思わしく無かった。ヒロトが学校の中間考査を終えて、

六日振りに綾香に会いに行くと、何時もの病室に彼女の姿は無かった・・・・

【第1話】

早春のぬけるような青空が広がっていた。
二階の窓から見渡したその上空には、ブルーインパルスが朝の練習飛行で描き出した、上向き開花の白い花が大きく一輪咲いていた。
地球に新たなほうき星が接近する一九九六年、雪解けも残るまだ肌寒い三月十日、僕は高校生を卒業した。
宇宙規模で考えれば、それは、あまりにもちっぽけな事だ。
今朝何時ものように起きて、電車に乗って二駅で降り、何時ものように駅からの道を歩いて学校まで来ても、やっぱり卒業の実感は湧かない。
高校の卒業式は、各クラスの代表者が証書を貰い受けるだけで、他は椅子に腰掛けたままだ。小、中学校の卒業式に比べて、なんと呆気ないものだろう。
工業高校は男子生徒が多いせいか、式の間もすすり泣くような声は一切聞こえない。いや、工業化学科にいる女子生徒が、数人すすり泣いているのがちらりと見えた。
部活に励んだ者達は、あるいはそれほどに感極まる思いがあるのかも知れない。
僕は少し冷めた気持ちで、彼女達を視線から外した。
式は早々に終了して、教室に帰ってから各自の卒業証書が配られる。
体育館から教室に戻る時も、何時もの朝礼でも終わったような、そんな感覚しかなくて、卒業式が終わった実感は全く無かった。
ただ、外を通る少しの間、青空がやたらと眩しくて、思わず目を凝らした。
教室で卒業証書とアルバムやしおりが配られた後、何事も無かったかのように帰りの挨拶をして終了。散ジリに教室を後にする。
僕は何故か、誰にも声をかけずに一人で教室を出ると、昇降口で

外履きのコインローファーに履き替えた。
二度と使わない上履きを破棄するためのゴミ箱が設けてある。毎年、あちこちに捨てられ、後処理が大変という学校側の配慮だ。
僕も、自分の上履きをゴミ箱に向かって無造作に放り投げた。
卒業証書の入った四角い筒を手に正門を出た僕が、この三年間で思い返す事といえば一つしかない・・・・それに比べれば、高校の卒業式など、どうでもいい事なのかもしれない。
レモンを切った瞬間に漂う、思わず目を細めてしまうほどの激しくすっぱい果汁香のような、そんな想い出・・・・・・

（１９９５年九月三日）
高校最後の夏休みが終わって間もない頃、僕は肺気胸で入院している友達の見舞いに行った。何時もは他の友人達数人と連れだって来るが、今日はアイツに頼まれていたマンガ本を持って来たのだ。
高校入学当初から仲良くなった親友の岡本淳は、夏休みの中盤に肺気胸と言う、片側の肺が萎んでしまい呼吸不全になる病気に罹り入院した。
やけに空いた駐輪場に原付バイクを停めて、古びた正面玄関を通り抜け内科病棟へ向かう。日曜日と言う事もあって外来も無く、院内は薄暗く閑散としている。増築の繰返しで継ぎ接ぎだらけの病院は、何回来ても迷ってしまう。
だから一人では来たくないのだ。
それとも、僕は方向音痴なのだろうか・・・・
板張りの渡り廊下は、何故か鶯張りのように大きな軋み音を出す。
関係ない通路を行ったり来たりしながら、内科病棟へ続く階段の上り口まで来た時、その踊り場に設けてある休憩所の自動販売機の前に一人の女性が立っていた。
彼女は少し困った顔で小さく自販機を叩いている。

水色のチェックのパジャマに淡いグリーンのカーデガンを羽織った姿は、ここの入院患者だろうと人目で判った。一般の人だったら、僕は迷わず素通りしていただろう。

面倒臭い・・・・

彼女の着ていたパジャマとカーデガンが、僕にちょっとした親切心をもたらしたのだと思う。

「どうしたの？」

「あ、これ・・・・出てこなくて・・・・」

僕の問い掛けに、一瞬息を呑むように振り返った彼女は、自販機を叩いていた事を咎められると思ったのか、少し震える声で小さく言った。

それとも、チンピラのような赤いアロハシャツが、彼女を少しだけ後退りさせたのだろうか。

入院が長いのか、元々なのか、ドールフィギュアのような彼女の白い肌は、窓から差し込む僅かな午後の日差しを跳ね返している。

「お金を入れた時、ランプは点いた？」

僕は、出きるだけ気さくに話し掛けた。

「点いたんですけど・・・・・ボタンを押したらランプは消えて、そのまんま・・・」

華奢な足腰に小さな身体、福与かではないがパジャマの胸には確かな膨らみがあるその娘も、高校生くらいだろうが、僕よりは年下だろうか。

「中で、引っ掛ってるのかな」

僕はそう言って、彼女の代わりに自販機を叩いた。しかし、何の反応もない。

あまり強く叩いて、防犯ブザーが鳴るのもシャレにならない。仕方が無いので、ジュースの取り出し口から手を逆さに入れて見た。取り出し口は、急角度で上に向かって、ゆるくカーブしている為、到底奥まで手は届かない。しかし、ゆるくカーブした所に缶やボトルが引っ掛る事があるのだ。

「大丈夫ですか・・・」
彼女も僕の側に屈んで、心配そうに声をかける。
「ああ、大丈夫」
僕は、そう応えたが、実際は無理やりな角度で入れた腕が痛かった。彼女は、その一瞬苦痛に歪む僕の表情を見たのだろう。
一一〇円くらい、そうまでしなくても・・・・と思うかも知れないが、自販機にお金を喰われる事が僕には許せないのだ。
中指の先に硬いものが触れた。これだと確信して、さらに腕全体を無理やりに入れる。無理な体勢に　肩の筋が伸びてしまいそうだった。
中指でなんとか押し上げた物体は、引っ掛かりを解いて落下した。
「これでしょ」
僕は、落下してきた緑茶の缶を手に取り、自信たっぷりの笑顔で彼女に見せた。
彼女は、小さく首を横に振った。
報われなかった僕の努力を哀れむような、悲しい表情だった。
「えっ、違うの・・・・おかしいなぁ・・・・」
僕は思わず苦笑して髪をかきあげた。
しかし、もう一度出口のカバーを開けて見ると、もう一つ、アクエリアスが落ちていた。彼女の前に、誰かがお茶の缶を詰まらせていたのだ。その人は、諦めて違うものを買ったか、そのまま帰ったのだろう。僕はアクエリアスを手に取って、
「じゃぁ、これでしょ」と彼女に見せた。
「あ、それそれ。ありがとう」
悩ましげだった表情が明るく変った。
すらりと細い指の小さな手で、僕の手からジュースを受け取る彼女の白い笑顔が眩しかった。それは、窓から射す光が反射していたからではない。

【第2話】

【2】

僕が友達の病院に見舞いに行く回数は、極端に増えた。

「皆川、おまえ最近やたら来ないか？」

「いや、まぁ・・・暇だからな」

僕は、ついでとばかりに岡本の病室にも立ち寄ったが、友人の彼にも彼女の事は内緒にしていた。たいした理由も無いが、何故だか、教えるのが勿体無いような気がしたのだ。

彼の病室は、ナースステーションの在る中央通路を挟んで彼女の病室とは逆側に位置していた為、気付かれずに済んでいた。

それに、岡本はトイレ意外では立ち歩けない安静患者だったし、その後自由に歩き回れるようになるとすぐに退院を希望した。

「かわいい看護婦のネェチャンでも見つけたんだろ」

「そんなんじゃねぇよ」

岡本は、三日に一度は来る僕を不審に思ったが、退屈が凌げて嬉しそうでもあった。

共働きで忙しい彼の両親は、殆ど病院には来ないようだった。

彼女の名前は藤島綾香。市内で最高学力を誇る県立女子高校に通う二年生で、荒くれの工業高校生から見れば高値の花だ。と言っても、二年になった春からこの病院に入院しているらしい。

僕は、彼女の病気に付いては尋ねなかった。

そんなに長い期間入院しているくらいなのだから、簡単な病気ではないだろう。

今にも倒れそうな、彼女のか弱い容姿を見て、訊くのが怖かったのかもしれない・・・・

岡本の肺気胸は、順調に回復して間も無く退院したが、勿論僕は一人で病院に通い続けた。

少しだけ院内を散歩して、休憩室で雑談を交わす。それが、何時も

の二人のデートだった。
一階の渡り廊下の途中からこっそり抜け出して、中庭を歩く事もあった。
好きな食べ物に嫌いな食べ物、誕生日、得意な科目・・・・・僕が体育と電気工学実習が得意だと言ったのに対して、彼女は数学と古文が得意だと言った。
さすがは市内一の学力校生徒と言ったところか・・・・それでも、そう言った相反した僕に彼女も好意を抱いてくれた。
彼女の事を少しずつ知っていく僕がいて、僕の事を少しずつ知っていく彼女がいる。
彼女はアイスクリームが大好きだと言ったので、僕はしばしば差し入れに持って行った。しかし、時には両腕に点滴を受ける痛々しい姿に遭遇する事もあり、そんな時は締め付けられるように心が苦しくなった。
心配そうに見つめる僕に、彼女は両腕に針を刺したまま暖かく微笑んだ。

【第3話】

【3】

（九月二十八日）

「あたしも、外に出たいなぁ」

病棟同士を繋ぐ三階の渡り廊下の窓から遠くの景色を眺めて、彼女が言った。

彼女はこの五ヶ月間、ほとんど病院の外には出ていないらしい。この時の「外」とは病院の、敷地の外の事だ。

「良くなったら、出られるんでしょ」

僕は、無責任に励ました。

「ねぇ、ちょっとだけ連れ出して・・・ほしいな」

「えっ」

僕は、彼女の言葉に少し驚いた。

入院中の人様の娘を勝手に連れ出して良いものなのか。決して優等生ではない僕でも、そのぐらいは考える。

しかし彼女は、鳥篭の中で過ごす、風切り羽を無くした手乗りインコのような生活を毎日送っている。僕は、ほんの少しの間だけ、彼女に遠くに飛べる羽を着けてあげたかったのかもしれない。

日が暮れてから彼女を病院の外にそっと連れ出した。

彼女はパジャマのままだったので、僕の着ていたリーバイスのGジャンを上から着せた。

元々大き目な作りのセカンドモデルのGジャンは、彼女の手を袖の外に通さなかった。

「あはははは、大っきいね。これ」

綾香は、余った袖口をぶらぶらと上下に振って笑った。

彼女の笑顔は、ここが病院だと言う事を忘れてしまいそうになる。

僕は、病院が好きではない。あの薬品のニオイに包まれた重い空

気も、不自然な清潔感も苦手なのだ。
それは、彼女にとっても同じなのかもしれないが・・・
久しぶりに外へ出た彼女の顔はあまりにも晴れやかで、病院からこっそり連れ出した罪悪感は一瞬で消えた。
原付バイクの後ろに乗せて病院の周りを一周した。
８時を過ぎると、この辺は殆ど車通りが無い。
僕の背中に抱きつく彼女の体温が、洋服の繊維を通り抜けて伝わり、夜風に踊る綾香の髪は、少し薬品の混じったようなシャンプーの香を漂わせた。
彼女から発するなら、クレゾールの匂いだって心地いい。
病院裏手にある神社の石段に腰掛けて、二人で夜空を見上げると、星に紛れて人工衛星が飛んでいるのが見えた。
「ほら、あれ。よく見ると少しずつ動いてるだろ」
真上に位置する一番深い夜空を僕は指差した。
彼女はその方向を見上げて目を凝らしている。
「ほんとだ。何で？あれ、星じゃないの？」
「人工衛星だよ」
「えっ、ウソ・・・・人工衛星って肉眼で見えるのね。知らなかった・・・」
そう言って、彼女は、吸い込まれそうな高い星空を、何時までも見上げていた。
「来年の春、百武彗星が来たら、山の上から見ようか」
「あ、テレビで言ってた彗星ね」
「半島の山頂から見る星は、ここの倍は見えるよ」
「ほんとう？行きたいなぁ」
上を向く彼女の白いアゴから、細い首筋に流れる曲線が、ギリシャ彫刻のように美しく、はしゃぐ笑顔が、三日月の光に照らされて輝いていた。

「大丈夫？」
「うん・・・平気」
病院に戻ると、彼女は少し疲れた様子だった。エレベーターを使って三階の病棟へ上がった。
夜風にあたるのも、あまり良くないのだろうか・・・・彼女の病気はいったい何なのだろう・・・・・
二人は、息を潜めながら四人部屋の病室に戻った。
隣のオバサンが起きていたらしく、小さく声を掛けて来た。
「夜這いかい。いいねぇ、若い子たちは」
振り向くと、仕切りのカーテンの隙間からオバサンの優しい笑顔が見えたので、僕達は愛想笑いで小さく会釈をした。

【第４話】

【４】

「皆川、お前、あの病院に通ってるだろ」

岡本が、学校で声を掛けて来た。

「えっ、なんで・・・・」

僕は、シラを切ろうとしたが、すでに彼は目撃しているらしい。しかも岡本が入院中、看護婦に妙な事を訊かれたそうである。

「岡本くんの友達って、誰か他にもここに入院しているの？」

看護婦は点滴の針を彼の腕に刺しながら言った。

「はぁ、なんでですか？」

「ほら、よく来ているお友達が、別の病室にも出入りしてるから」

本来なら、こんな会話をしてはいけないはずだが、高校生の事だと思い、看護婦も油断して口が滑ったのだろう。

その時、岡本は身内でも入院したのかと思い、あまり突っ込んだ事を僕に訊かなかったのだ。

その後、退院した彼が外来通院した時に、たまたま僕を見かけて後をつけたら、内科の病室から綾香と一緒に出てきたと言う。

僕は仕方が無く、綾香と出会った経緯を彼に話した。もともと隠すような事でもない。岡本は、「俺のお陰で出会えたんだ」などと、冗談交じりで僕を冷かした。

「でも、彼女、そんな長い間入院してるなんて、何の病気なんだ」

「俺にもよくわからないよ」

岡本はそれ以上訊いてこなかった。僕よりも数段頭のいいアイツは、もしかして何かに気がついていたのかも知れない。

（九月三十日）
その日、綾香の病室へ入ると、窓際の、彼女のベッドの周りにカーテンが引いてあった。
僕は、何がどうなっているのか解らず、入り口付近で足を止めた。
「着替えてるみたいよ」
隣のベッドのオバサンが言った。
隣にいるおばさんは大原さんと言うらしいが、優しく親切だと綾香が前に言っていた。
夜這い発言の、あのオバサンである。
「お母さん？」
オバサンの声と、自分に用のある人の気配を感じたのだろう。綾香が、カーテンの向こうから声を出した。
「あ、俺。学校早く終わったんだ」
「えっ、ヒロ？ちょ、ちょっと待っててね」
彼女は、少し慌てた様子で言った。
彼女がもそもそと、中で動いている気配が伝わってくる。
「ああ。大丈夫だよ。俺、廊下にいるから」
カーテン越しに着替えをする彼女を、少しだけ想像した僕は、気を利かせて廊下に出ようとした。
僕が立ち去ろうとして向きを変えようと思った時、
「あっ」
彼女が声を出した。
閉じたカーテンの裾と床の隙間に何かが落ちてきたのが見えた。
雪のように白くて全体をレース模様が覆い、ひも状のものが着いている物体・・・・・
慌てて鷲づかみで拾い上げる、彼女の白い手が見えた。
「見えた？」
僕の気配がまだ在るのを感じた彼女が、声を掛けて来た。

「えっ、ちょっとだけ・・・」
　僕は、つい、正直に言ってしまった。
「きゃー、はずかしい・・・・・」
　彼女の声は、恥ずかしさのあまり笑っていた。
「一瞬だよ、ほんの一瞬」
　僕は、殆ど見えなかったような言い訳をした。
「廊下にいるからね」僕は続けて言うと、すぐに病室を出た。
　着替えと言うから、てっきりパジャマの着替えだと思っていたら、下着も着替えていたのだ。僕は一瞬だけ見えた彼女の雪のように白い下着を思い出して顔中が紅潮して熱くなった。

　着替え終わった彼女が病室の外に出てきた。ベージュ色にピンクのチェック柄のパジャマを着て、その上にオレンジ色のカーデガンを羽織っていた。
　さっきの事を思い出し、白い頬をピンク色に染めて「恥ずかしい、恥ずかしい」と何度も言っていた。
　僕は、「白いモノ」しか見えなかったと、訳の解らない言い訳をした。

　一階の病棟を繋ぐ渡り廊下の横から、非常階段へ繋がるコンクリートの通路脇に腰掛けて、裏庭から見える山の木々を眺めながら二人でアイスクリームを食べた。
「今日は制服なのね」
「ああ、今日は学校近くの駅までバイクで来て、そのまま病院に来たんだ。授業が早いの知ってたし、一度家に帰るのが面倒だから」
「もう、学ラン着てるの？」
「中は、半袖だけど」
　僕は、学ランの中に来ているTシャツを見せた。
　硬派系の連中は、学ランを好む。まだ残暑が尾を引く暑い日でも、

Tシャツの上に、直に学ランを着るのだ。
そんな着方に驚いた彼女が
「シャツは？」と言った。
「そんなに着込んだら、暑いじゃん」
僕が笑いながら言うと、思わず彼女も笑っていた。
彼女は、僕のサージで出来た学生服を珍しそうに手で触れ、
「変った生地ね」
そう言って、学ランの裏がどうなっているのかしきりに捲ろうとしていた。

【第5話】

ある日、綾香の病室に向かう途中、一階にある休憩室の前を通った時だ。
彼女が休憩室の椅子に座ってこちらに手を振っていた。
僕は、家族の誰かが来ているのかと思い、遠慮気味に彼女に近づいた。
「こんにちはぁ」
衝立の陰にいた女子高の制服を来た娘が、横からいきなり声をかけてきた。
「あ、学校の友達。ゆかりちゃん」
綾香に紹介されたゆかりは、大きな目を細めて笑いながら僕に会釈をした。
「あ、俺・・・」
僕がそう言いかけると。
「皆川ヒロトくん」
綾香がゆかりに向かって僕を紹介した。
僕も、笑って軽い会釈をした。
その後三人で少し話したが、女性二人を相手にするプレッシャーに負けて、僕はその場を後にした。

「この前はゴメンね」
次に会った時、彼女が言った。
「えっ？」
僕には最初、意味が判らなかったが、学校の友達が来ていた時の事らしい。
「せっかく来てくれたのに・・・・・」
僕は全然気にしていないし、むしろ学校の女友達が時々来ている

と知って、少し安心したくらいだ。
「全然気にしてないよ。それより、本当に女子高だったんだね」
「あははは、今度、あたしの制服姿も見たい？」
彼女は、ちょっと挑発的な笑顔で僕に言った。

病室に彼女を送っていくと、隣のベッドに入っていた大原のオバサンが身支度を整えていた。
「アヤちゃん、元気でね。あなたも早く良くなるといいわね」
大原さんは、今日退院するそうだ。彼女は綾香の手を握り締めた後、僕の腕を横からパンッとたたいて、
「アヤちゃんを宜しくね」
と、笑って言った。
僕は、ただ笑って頭をかくのが精一杯だった。
「オバサンも元気でね」
綾香は、そう言って病室の外に出ると、大原さんが廊下から見えなくなるまで手を振っていた。

（十月五日）
「あたしも海見たいなぁ」
談話室で雑談していた時、アイスクリームを食べていた彼女は、突然僕に向かって呟いた。
彼氏と共に夏の海に行った話を、ゆかりから聞いたらしい。
僕は、正直困惑した。彼女の前では笑顔を装ったが、多分引き攣っていたに違いない。
連れて行くのは不可能ではないし、普通なら何でも無い事だ。しかし、この前、少しの間外を連れ回しただけで、彼女は、かなりの体力を消耗していた。
僕は、しばらくの間、学校にいてもその事ばかり考えていた。

もともと疎かにしていた勉強は、尚更手に付かない。
綾香は、気が置けない僕に向かって、なんとなく口に出したのだろうが、普段の閉ざされた生活環境を思うと、願いを叶えてやりたかった。
何となく口に出した言葉だからこそ、おそらくそれは、彼女の本音だろう。
僕自身も、出来る事なら彼女と外へ出かけたい気持ちはある。
その時の僕には、誰に、どう相談していいのかも判らなかった。

「岡本、頼みがあるんだ」
二時間目が終わった休み時間に、僕は学食で彼に声を掛けた。
「どうしたよ」
てんぷらうどんをすすりながら、岡本は振り向いた。
「ＲＺ貸してくれ。半日」
僕は、綾香の事を話した。
体力の消耗が激しいのに、海へ連れて行けるものかどうか・・・
うどんを食べ続けながら、僕の話を聞いていた岡本は、
「皆川、連れて行ってやった方がいいかもな・・・・」
と、コップの水を一口飲んで続けた。
「いや、ほら、彼女の願いだろ。叶えてやれよ。俺のバイクなら何時でも貸してやるから」
「でも、病気が良くなってからの方がよくねぇか・・・・」
僕は、彼女が途中で具合が悪くなったら面倒だと思っていたのかも知れない。
「でも、彼女は今行きたがってるんだろ」
岡本は、行きたがっている彼女を連れて行けと言う。
しばらく悩んだ僕は、再び彼女に翼を与える決意をした。
今度は、より遠くへ飛べる翼だ。
禁断の風切り翼・・・・・・・岡本にＲＺ２５０Ｒを借りた。

前日の夜に、バイクを借りる為、岡本の家を訪ねた。
キーを手渡す岡本は笑って
「ニケツで捕まるなよ」
この夏に自動二輪免許を取得したばかりの僕は、勿論一年以内に二人乗りをすると違反になってしまう。
そして、もし違反キップを切られたら、学校に免許と違反の事がばれてしまい、間違いなく停学になる。
警察から学校に、交通違反の事で連絡が行く事は無いが、生徒指導の担当教師が月に一度、警察へ出向いて生徒の違反者がいないか調べるのだ。
今までにも、そうやって見つかって停学になった連中を何人も見ている。が、今はそんな事は問題ではなかった。

【第6話】

（十月十日）

日の出と共に、彼女を病院へ迎えに行った。予備のヘルメットも岡本が貸してくれた。

僕は、自宅の近所迷惑にならないように、一つ目の角までバイクを押して行き、そこでエンジンに火を入れた。

キックスターターを軽く蹴飛ばすと、一発でエンジンは始動した。小気味良くアイドリングするエンジンの音に、僕の心は程よい緊張に包まれた。

彼女はパジャマから外着に着替えてこっそり病室を抜け出し、一階の薄暗い喫煙室の前で待っていた。

その姿を見て、僕は一瞬立ち止まった。

「制服着ちゃった」

少し照れくさそうに笑う制服姿の綾香は、いつもの入院患者ではなく、女子高生だった。

「バイク、大丈夫？」

僕は、少し丈の短い紺色のスカートに視線を落として言った。

彼女は、スカートの裾を少しだけ掴んで

「自転車にも乗るんだから大丈夫でしょ」と笑った。

彼女の手を引いて病院の外へ出ると、さっきまで白み架った朝未来の空は、ほんのりと秋風が香る、みかん色の朝焼けに変わっていた。

「ヒロも学ラン着てくれれば良かったのに」

バイクのシートに跨った綾香が言った。

「校則違反バレバレになるよ」

原付バイクの免許は、学校に届を出せば認められるが、自動二輪免許を認めている学校は県内に一校もない。

僕は、教習所で教官を後に乗せた時のように、ゆっくりと丁寧に

バイクをスタートさせた。しかし教習の時とは違い、後ろには殆ど重量を感じなかった。

病院の前から伸びる短い直線道路から国道へ左折すると、精一杯クラッチ操作に気を配ってギヤチェンジをした。

2速―、3速―、4速―、5速―

「すごいスピード！」

「怖くない？」

「全然、平気」

彼女の声は高揚する気持ちを露わに、弾んでいた。

そんなにスピードは出していなかったが、身体全体で受けるバイク特有の風と、サイレンサーから発する音が、いっそうスピード感を醸し出したのだろう。

港町のこの辺りでは、海だけ眺めるならすぐ近くで十分だった。しかし僕は、綾香に砂浜を見せてやりたかった。

漁港ではなく、海岸線の続く海を。

産業道路を通り抜け、河口に架る大きな橋を渡って海浜公園を目指した。

橋の上り坂に備えて、六速から五速へ、アクセルを軽く煽りながらシフトダウンした。

重力に逆らって昇り勾配を一気に駆け上がる。

「海だよ、海！すっごい、イイ眺め！」

船の航路を確保する為に大きく山なりに架った橋の、地上高四〇メートルの頂上で、彼女は叫んだ。

少しだけバイクのスピードが上がると、綾香の細い腕が僕の身体を強く抱きしめた。

彼女の柔らかい身体の感触と高鳴る心臓の鼓動が、僕の背中に、あまりにもリアルに伝わる。

焼けたオイルの匂いを掻き分けて、彼女が発する生々しい女性の

香を、ヘルメット越に感じた。
河口から広がる海面に際立つ波が、昇り切って間もない朝の太陽に照らされてキラキラと輝いていた。

【第7話】

海岸線沿いに続く道路をゆっくりと流して、大きな駐車場にバイクを停めた。
「こんなに長い海岸線が在ったのね」
彼女が、ヘルメットを脱ぎながら言った。
「俺達は、いつもバイクで遊び回ってるから、少しだけ行動範囲が広いんだよ」
「ふふふ、工業高校の人達って、放課後はみんなバイクに乗ってるよね」
綾香は笑ってそう言いながら、防波堤の階段から砂浜に降りようとしていた。
「みんな、学校には内緒で免許を取ってるけどね」
僕は階段の横から直接砂浜に飛び降りて、階段を歩く彼女の白い手を取った。
少しの間、二人で砂浜を歩いた。
彼女が疲れないように、ゆっくり、ほんとうにゆっくりと・・・・
その世界には、うみネコと僕達しか存在しなかった。
この時、綾香とは初めてまともに手を繋いだ。
白く細長い彼女の指が、僕の指と絡み合った。
華奢で少しひんやりとした手は、何故かとても新鮮で、まるで仔兎を抱いているような気持ちになる。
海から吹く潮風が、片手でかきあげた彼女の黒い髪を大きく揺らしている。
大きく打ち寄せる波しぶきが、風に乗って微かに二人の頬に触れる。
防波堤に腰掛けて、流れる時間を二人で感じた。
「ねぇ、ヒロは誕生日に、何が欲しい」
「え、まだずいぶん先だよ」

「判ってるけど、訊いておきたかったの」
「う～ん。今は何も浮かばない・・・・綾香がいるから、それでいいや」
僕は、今思ったことを素直に言葉にした。
「そう・・・・」
彼女は少しだけ寂しそうに笑った。
「じゃぁ綾香は？クリスマス、何が欲しい？」
「う～ん。まだ先だし・・・あたしも、ヒロがいるから・・・でも、何か一つ願いが叶うとしたら、元気な体が欲しいな。そして、ヒロと旅行に行きたい」
彼女は笑っていたが、その水平線を見つめる深い海色のような瞳には、寂しさが映り込んでいる。
底知れぬ深い海のように、寂しく澄んだ彼女の瞳は、瑠璃色ではなく、海色だ。
「じゃ、退院したらまずは、旅行だね」
僕は、彼女に向かって精一杯明るく言った。
「泊まりがいい」
綾香が海を見つめたまま言った。
「泊まり？」
「あ、ヒロ今、やらしい事考えたでしょ」
「そ、そんな事ないよ」
彼女の笑顔が何時もの明るさを取り戻したように見えた。
塩辛い風に吹かれながら、キスをした。
彼女の唇は、少しだけ乾いていたが、僕の唾液で潤いを取り戻した。たぶん僕の唇も乾いていただろう。それは彼女の唾液によって、潤った。
この夢のような時間が永遠に続けばいい。
このまま時間が止まって全てが無くなっても、こうして彼女と一緒の時間を二人で過ごせるなら、僕は何も惜しくは無い。

【第8話】藤島綾香編・1（前書き）

【藤島綾香編】はブログ掲載時に加筆挿入したもので、本編より？好評だった為、そのままの構成で掲載いたします。

【第8話】藤島綾香編・1

（藤島綾香編・1）

「どういう事なの？」

普段穏やかな綾香が声を荒げるなど、滅多に無い事だ。

「いや、俺も高校行って、いろいろあるんだ」

慎二はそう言って、頭をかいた。

木村慎二は中学の三年生の時から付き合っている、綾香の彼氏だった。しかし、別々の高校へ進んだ二人は、次第に会う時間が少なくなり、先週の日曜日、彼が他の女の子とデートをしているのを綾香が見てしまったのだ。

珍しく部活が早く終わった土曜日の夕方、綾香は慎二を呼び出した。

「高校へ入って、まだ二ヶ月よ」

「俺たちにとって、二ヶ月は大きいよ」

慎二は綾香の目を見なかった。会ってからずっと、少し俯いたままだ。

そう、彼の言う通りかもしれない。

学生生活にとっての二ヶ月は、沢山のエピソードを作るには十分過ぎる時間だった。

吹奏楽部に所属している綾香にとっては、あっと言う間の二ヶ月だった。

中3で最上級だった部活での待遇も、高校に入れば一気に一番下っ端に逆戻り。

練習前に椅子を並べたり、先輩の楽器を揃えたり、そして、部活が終われば、全ての後片付けがある。

練習は毎日、6時まであり、土日もほとんど練習がある。

慎二が他の女性に手を出した言い訳には十分だった。

綾香も、適当な理由で部活を休み、慎二と会う時間を作る事は可能だったかもしれない。
現に、家の事情などを理由に、時折休む娘も少なくない。
しかし、綾香はそう言う性格ではなかったのだ。
真面目に取り組んでいる部員も多い。
常にレギュラーメンバーともなれば、少々の熱でも部活に出て来る。
綾香は、そっちへ行きたかったのだ。
中途半端はいやだ。別に音楽家を目指しているわけでもないが、やるからには、スペシャリストになりたい。
二人の間には沈黙する時間だけが流れた。
周りの、女子高生や若いカップルの楽しげな話ばかりが、やたらと耳に入ってくる。
こう言う話は、静かな喫茶店でするべきだ。
綾香はそう思って後悔した。
「こめんな、俺、お前を待てそうにないんだ」
慎二はそれだけ言うと立ち上がり、先にハンバーガーショップを出て行った。
綾香は両手の拳を握り締めた。
みんなが見ている、堪えなければ・・・　堪えるのよ。
テーブルのトレーの上に乗っていたナプキンに、ぽたりと透明な雫が一つ、滴り落ちた。

【第8話】藤島綾香編・1（後書き）

【藤島綾香編】の後半でヒロトとのエピソードに合流する形になっています。

【第9話】藤島綾香編・2

（藤島綾香編・2）

「おはよう」

藤島綾香に声を掛けて来たのは、入学当初から直ぐに仲良くなった大崎ゆかりだった。

「おはよう」

綾香も笑顔で返して

「今日は自転車なんだね」

「うん。まあね。たまにはカロリー使わないと」

そう言ってゆかりは笑った。

綾香は自転車通学だが、ゆかりは面倒臭いと言っては、しばしば電車で来る。

大通りの歩道を大勢の学生達が行き交う朝の風景。

制服はそれぞれ違うが、だいたい学校の登校時間は何処も同じようなものだから、信号待ちの横断歩道などは、この時間帯に限って、まるで都会の横断歩道並に混雑する。

国道の大きな横断歩道を渡ると、それぞれの学校へ向う為、途端に学生達は散りジリになる。

運河に掛かる橋を渡って、その河に沿ってしばらく走り、途中から住宅街を抜けて、その女子高は在った。

市内では一番、県内でも1、2を争う進学校だ。

昔は高等女学校と言う名前で、戦前から在る由緒ある学校の割には特に厳しい所はない。

昔はかなり厳しい校則に縛られていたらしいが、時代の流れと言うものだろう。

スカートが短いからと注意される事も無い。

藤島綾香は今年高校へ入学した１５歳。３月生まれの彼女は、来年の春にならないと１６歳にはならない。
綾香の家庭は、極々、普通で、特に説明するほどでもない。ただ、自営業を営む父と母は、サラリーマン家庭に比べれば、年中忙しいかもしれない。
春の暖かい風が教室の窓から吹き込んで心地いい。
校舎の三階の窓からは、遮る建物が無い為、工業港が遥か遠くに見える。
お昼休み、綾香はベランダの手すりに頬杖をついて、遠くを眺めていた。
パルプ工場のプラントが無ければ、水平線とそこに浮かぶタンカーが見えるかもしれない。
天気予報は梅雨入りを宣言していたが、今日も空は晴れ渡っていた。
「どうしたの？」
ゆかりが隣に来て声を掛けて来た。
綾香は考え事をしていた。土曜日の出来事が頭を離れなかった。
もう忘れよう。そうは思っても、悲しい事ほどなかなか忘れる事が出来ないのが人間だ。

「そっか、今日のアヤ、どうりで笑顔に陰りがあると思った」
事情を聞いたゆかりが言った。
入学当初、彼女も綾香の彼氏には会ったことがある。
「けっこう、いい奴っぽかったけど・・・あ、だから意外ともてるのかも」
ゆかりが、そう続けて言うと、遠くを見ていた綾香がちらりとゆかりを見た。
「あ～あ、やっぱり、全てを投げ捨てて、男一筋な女がいいのかなぁ」
綾香は、空を見上げて呟いた。

「綾香なら、すぐにいい人見つかるって」
ゆかりは、ポンッと綾香の背中を叩いた。

【第１０話】藤島綾香編・３

（藤島綾香編・３）

朝から降り続く雨は、午後になっても止まなかった。
学期末考査が間近な為、今日から一週間部活は休みになった。
「部活が休みの時くらい晴れてくれりゃいいのにね」
ゆかりが愚痴る。
雨の日は、ゆかりは電車を利用する。
帰りの駅まで付き合って、綾香も駅のひさしの前で立ち話。
綾香は雨でも自転車で来るので、ゆかりを見送ったら自転車に乗って帰るのだ。
「しょうがないよ」
綾香は笑って応えた。
「ねぇ、アヤ。映画でも観に行こうか」
「これから？」
「うん。今から」
「試験、明後日からだよ。あたしは、いいけど・・・」
と、ゆかりを見つめる。
「だって、アヤとはなかなか遊ぶ時間ないし。大丈夫、別に、赤点取ったからって死ぬわけじゃあるまいし」
突然、ドンッと、綾香に誰かがぶつかってきた。
「キャッ」
「あ、ごめん、大丈夫？」
ふざけ合っていた詰め襟の男子学生が、綾香にぶつかったのだ。
「あ、平気」
綾香は、よろけた自転車を抑えて言った。
「ごめん、見てなくて。何処も汚れなかった？」
「うん、大丈夫よ」

意外と素直に謝る相手に、綾香は何となく微笑んだ。
男の子は綾香から離れると、
「お前、こんな所で押すなよ」
一緒にいた連れを睨んだ。
「あれ、工業高校でしょ。なんか、危険だよね」
ゆかりが、駅へ入っていく男子高校生を目で追って言った。
「そう？何か、優しそうだったよ」
綾香はそう言って微笑む。
それを見たゆかりは
「アヤ・・・・あんた、男に餌えてんじゃない？」

【第１１話】藤島綾香編・４

（藤島綾香編・４）

夜空を鮮やかな閃光が彩ると、爆音が空気を振るわせる。
綾香とゆかりは、女二人で花火大会へ出かけた。
「歩きにくいね」
ゆかりが言った。
それは、人混みの話ではなく、二人共浴衣を着ているせいで、思いの他歩幅が開かないのだ。
「ねぇねぇ、二人きり？一緒に花火観ない？」
「おっ、いい女発見。俺らと遊ぼうよ」
女二人で歩いていると、あちこちから声が掛かる。
勿論、ただの、ナンパと言うやつだ。
「あの男、鏡見た事あんのかね」
ゆかりの言葉に、綾香も思わず吹き出す。
「アヤ、金魚すくいやろ」
ゆかりが金魚すくいの生簀に小走りで駆け寄る。
綾香もゆかりに並んで、生簀の横に屈む。
「ゆかり、すくえるの？」
綾香が訊いた。
「大丈夫じゃない？」
と、言いながら、お金を払って始めてしまった。
「ゆかり、そんな大きいの絶対無理だよ」
「大丈夫、大丈夫」
ゆかりはやたら大きな獲物を捕まえようとしていた。
「絶対ムリ。少しは考えなさいよ」
「大丈夫だってば。ほら！」
そう言って、金魚をすくった瞬間、モナカで出来たひしゃくは柄

の部分からボロッと折れて水の上に落ちた。
「あはははっ」
綾香は、思わず大声で笑ってしまった。
小さな子ならともかく、こんなにあからさまに終わりを告げた金魚すくいを見たのは初めてだ。
ゆかりは少し口を尖らせて
「じゃぁ、アヤやってごらんよ」
「しょうがない、お手本見せてやるか」
そう言って浴衣の袖をたくし上げる。
実は、綾香は金魚すくいをやるのが初めてだ。
小さい頃から見るのが専門で、自分ですくった事は無い。
「アヤ、あれ、出目金狙おう」
「やだ、赤いのがいい」・・・赤い出目金もいるが・・・・
スッと、水面近くに浮いてきた金魚を素早くすくって、左手のお椀に入れた。
「やったーっ!!」
「すごい!!アヤ」
こんな事で大はしゃぎの二人だった。
テキ屋のおじさんも思わず喜ぶ。
その後、綾香は二匹目もゲットした。
1匹もすくえなかったゆかりには、テキ屋のおじさんが、サービスで1匹、水の入った袋に入れてくれた。
二人は、金魚と綿菓子を手に、グランドフィナーレに近づく花火を一望する為に、河川敷の人込みの中へと下駄を鳴らして歩いて行った。

【第１２話】藤島綾香編・５

（藤島綾香編・５）

初めてその症状が現れたのは、夏の合宿の時だった。
朝からがむしゃらに照りつける太陽は、あっという間に真夏日の気温へと大気を熱していた。
晴れ渡る空の彼方には、入道雲が背伸びをしている。
校舎の外れに、合宿や会合？の為の会館が在る。
シャワーやキッチン、布団も常備している為、寝泊りはそこで行うが、練習は音楽室と空き教室を使う。
春、秋ごろは屋上で練習する事もあるが、この炎天下では忽ち全員がダウンするだろう。
教室の窓を全開にしても、生温い風が吹き抜けるだけで、いっこうに涼しさは感じられない。
綾香は、この日、朝から体調が良くなかったが、初めての合宿の疲れだろうと思っていた。
暑いのはみんな同じ。自分だけ、休んで涼む訳にはいかない。
しかし、合宿の疲れにしては、彼女の血圧は下がりすぎていた。
この頃になると、合奏のパートも在る程度決められ、一年生も混ざって演奏をする曲がある。
肺活量を要して息を吐き続ける楽器の演奏は、綾香の体調を悪化させていた。
綾香は、目の前がグラグラと揺れるのを感じた。
おそらく、揺れているのは景色ではなく、綾香本人だったのだろう。
既に譜面は読み取れなかった。
視界が狭まり、目に映るものが白黒写真のように色を失った。
そして突然真っ暗な闇に包まれた。

ダンッ！
「きゃっ」ガラガラッ・・・
腰掛けていたにも関わらず、綾香は前のめりに倒れた。
彼女はフルートを担当していた為、持ち物は小さかったが、綾香が前のめりに倒れた時、前に座っていたトロンボーン奏者の娘もいっしょにひっくり返ったのだ。
声をあげたのは、トロンボーン奏者の娘だった。
演奏に夢中だったみんなは、何が起きたのか一瞬、判らなかった。

「アヤ！」
バタバタと保健室に駆け込んできたのは、ゆかりだった。
「ああ、ゆかり。学校、来てたの？」
綾香は保健室のベッドでおっとりと微笑んだ。
「うん。英文のレポート出しに来た所。アヤ、平気？」
ゆかりは、何時に無く、心配そうな顔だ。
「大丈夫。多分、貧血ね。この暑い中、そんなに走って、顔が汗だくよ」
綾香の笑顔は穏やかだった。
とりあえず、ゆかりは一息ついて、ハンカチで汗を拭った。
校舎の影に位置する保健室の窓からは、心地よいそよ風が流れ込んで、白いカーテンを揺らしていた。

綾香は、結局、合宿を途中で断念し、自宅へ帰る事になった。
そして、翌日になっても起き上がれなかった彼女は、母親の勧めで病院へ検査に行った。

【第１３話】藤島綾香編・６

（藤島綾香編・６）

年が明け、季節は冬を通り抜け、春までも追い越そうとしていた。

「ゆかり」

「何？何か、欲しいものある？」

「あたし、卒業できないかもしれない・・・・」

その言葉、その表情はあまりにも無機質で、ゆかりは一瞬、血の気が引いた。

「何言ってるの？半年や一年学校休んだって平気だよ。一緒に大学行こう」

綾香は病室のベッドで小さく肯いた。

その微笑みは、何処か力無いもので、綾香の白い顔を強調させた。

「あたしは、どうせ一浪するから、ちょうどいいかもね」

ゆかりは、わざとおどけるように言って笑うと、綾香もつられて笑った。

昨年の夏以降、通院を続けていた綾香だったが、貧血や眩暈の症状は悪化する一方で、学校でも何度も倒れた。

日常生活に支障をきたした為、二年生になって直ぐ、彼女は総合病院に入院する事になった。

少し、長い治療になりそうだ。そう医師からは伝えられた。

やはり、殆どをベッドで過ごすのがいいのか、学校へ通っている時よりは身体の調子は回復していった。

最初の頃は、クラスの友達や、部活の仲間など、毎日のように見舞いの客が来て、病室は賑やかだったが、月日が経つと、まるで忘れられたかのように、来客は減っていった。

定期的に来るゆかり意外は、時々クラスメイトが訪れるだけだった。

入院が長いと、そんなものなのだろうが、一日中の殆どをベッドで過ごし、建物からも殆ど出ない　綾香の生活は、体調の良し悪しに関わらず、気力を奪い去った。
月に一回、外泊許可を受けて、一時帰宅する事があるが、長い時間立って歩き回ると、途端に動悸と眩暈に襲われた。
春から夏の陽気に、季節は変わろうとしていて、窓から入る風は、日に日に暖かくなってゆく。
そんな季節の移り変わりが、こんなに切なく感じたのは、綾香にとって初めての事だった。
それでも、励ましてくれるゆかりの為にも負けたくない。そんな気持ちが綾香の中にはあって、それは、本来の明るい彼女の性格をかろうじで維持する活力になっていた。
「じゃぁ、明日から試験だから、あたし、そろそろ行くね」
「ありがとう、ゆかり。赤点取らないでね」
綾香は穏やかに微笑んでいたが、そこに、生命の気は僅かしか感じられなかった。
自分より少しだけ小さい綾香の身体が、やたらと小さく見える。
「はいはい、一応、頑張るよ」
ゆかりは笑顔で手を振って病室を出ると、階段の所まで足早に歩いた。
走りたかったが病院内だから、そう言う訳にはいかない。
階段まで持ちそうも無かった。
目の前のトイレに駆け込み、個室のドアを閉めて鍵をかけた時、涙は彼女の頬を伝っていた。
「アヤ・・・良くなるよね・・・・・」
ゆかりはドアにもたれ掛り、外に声が漏れないようハンカチで口を抑えて、声を押し殺して涙に咽た。

【第１４話】藤島綾香編・７

（藤島綾香編・７）

「木村慎二くん？」
「キミは・・・・」
「大崎ゆかりです。前に一度」
「ああ、綾香の友達の」
ゆかりは、以前の綾香の彼氏だった、慎二の学校の前に来ていた。
男子高の為、校門を出て来る生徒は、みんな彼女と慎二を視界に収めて行く。
それが、少し鬱陶しいように慎二は
「どうしたの？」
「アヤが、入院してるんです」
「あぁ・・・・噂で聞いた。春からずっとなんだって」
「一度くらい、お見舞いに行ってあげてください」
ゆかりは、慎二の目を真剣に見つめた。
「でも、俺、もう関係ないし・・・・別れて一年も経つんだぜ」
ゆかりの視線から慎二は目をそらした。
綾香が好きだった男。それが、今、こんな態度を見せる事が、ゆかりは悲しかった。
「そんな・・・中学からの付き合いだったんでしょ。お見舞いくらい」
ゆかりは、唇をかみ締めた。
「俺が行ったからって、どうにもならないんだろ」
慎二は俯き加減で言った。
「どうにもって、どう言う意味？」
ゆかりはキッと睨んだ。
「いや、とにかく・・・関わりたくないんだ。じゃぁ、俺、約束が

あるから」
慎二はそう言って、自転車のペダルを踏んで、ゆかりの前から消えて行った。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何もしない、何処にも行かない夏は足早に通り過ぎようとしていた。
それが、綾香にとって、長いのか、短いのか、それすら測る目安は無かった。
毎日同じ時間に起きて、決まった時間に3食の食事をとって、同じ時間に眠る。
検査の時間意外は、ほとんど自由だったが、出来るだけ立ち上がって動き回る事はせず、安静にするよう言われていた。
花火大会の日、空気を振るわせる打ち上げ花火の音だけが病室に聞こえてきて、余計に切ない気持ちになった。
「去年の夏は、ゆかりと浴衣を着て、花火を観に行ったっけ」
何となく、呟いた。
綾香は、静かに目を閉じて、ドンッ、ドンッと胸に響く音を聞きながら、些細な想い出に浸っていた。
「アヤ」
小さな声に呼ばれたが、最初、綾香は空耳だと思った。
就寝時間ではないが、隣のベッドのカーテンは閉められていて、綾香のベッドも、半分カーテンを引いていた。
「アヤ」
その小さな声は、気のせいではないようだ。
綾香はゆっくりと頭を持ち上げた。
ゆかりが立っていた。
「面会時間終わっちゃったよ」

綾香は言った。
「大丈夫でしょ、少しくらい」
ゆかりは、手に持っていた小さなビニール袋を見せて笑った。
「何？」
それは、縁日で取ってきた小さな金魚だった。
「今年はあたしも取れたよ」
ゆかりは子供のような笑みで言った。
綾香は、ゆっくりと起き上がると、ゆかりと一緒に近くの休憩ロビーまで歩いた。
「病室じゃ、金魚なんて飼えないよ」
「それぐらい判ってるよ」
「花火、観に行ったんじゃないの？」
「観たよ。途中まで」と、ゆかりは笑って
「アヤに金魚見せてやろうと思ってさ」
ゆかりは、彼氏を外に待たせて、お祭りの夜に一人でいる綾香に会いに来たのだった。
花火のラストを飾る、ナイアガラとスペシャルスターマインを観れずに、ゆかりの彼氏は少しだけ不機嫌になったが、ゆかりにとって、今は綾香の方が大切だった。
それに、彼氏自身も、そんな友達思いのゆかりが好きなのだ。
「今年は浴衣着なかったの？」
「一人で着てもつまんない」
ゆかりはそう言って「はい、差し入れ」
もう一方の手に持っていたコンビニの袋からハーゲンダッツのアイスを取り出して、綾香に渡した。
「なんか、溶けかけてる・・・」
二人で、アイスを食べながら笑った。
スペシャルスターマインの連続して打ち上げられる音が、窓の外に見える暗闇を震わせていた。
綾香は、ゆかりの持って来た金魚の入ったビニール袋を指で突いて

「ありがとう、ゆかり」
ゆかりは、スプーンを咥えたまま、少しだけ照れた笑いを浮かべた。
涙が込み上げて来たが、うまく堪える事ができた。

【第１５話】藤島綾香編・８

（藤島綾香編・８）

「やっぱり、行くの止めようかな」
ゆかりは旅行バッグに荷物を詰め込みながら言った。
「何言ってるの、ゆかり。おばあちゃん、楽しみにしてるんだよ」
ゆかりの母親は、たたんだ洗濯物を片手で抱えながら、彼女の背中を軽く叩いた。
父のお盆休みに合わせて、ゆかりの家族は、揃って父方の田舎に出向くのだ。
岩手に在る父の実家は海沿いの綺麗な入江に囲まれた町で、毎年家族で出向いている為、祖父母も、孫の顔を見るのを楽しみにしている。
「じゃぁさ、あたしは一足先に帰るよ。孝志がいればいいでしょ」
「ネェちゃん、また、ばあちゃん俺に押し付けるのか」
今年、中学に入ったばかりの孝志が、直ぐ傍で自分の荷物を確認しながら、少し口を尖らす。
「あんたね、おばあちゃん孝行くらいしなさい」
ゆかりは、弟の孝志に向ってヘアブラシを投げつけた。
「しょうがないわね。綾香ちゃんが気になるんでしょ」
ゆかりの母も、娘の親友の事情は知っている。
何度も家に遊びに来たので、顔もよく知っていたのだ。
「だって、アヤんとこ、お店やってるからあんまり病院に行けないんだよ」
ゆかりは真面目な顔で母に言った。
「あんた、岩手から一人で帰って来れるの？」
「失礼な、心配無いよ」
「電車一本だから、方向音痴のネェちゃんでも大丈夫だろ」

孝志が笑って言った。
「うるさい！」
ゆかりが孝志を睨んだ。
「しょうがないわね。ま、友達思いはあんたの取り得みたいだし」
母親は肩をすくめて
「盆踊りは出てね」
「判ってるって。一日出ればいいでしょ」
ゆかりは、さっき放り投げたヘアブラシを掴んでバックに入れた。
母親は、思わず小さく溜息をついた。
「ま、いいじゃなか。高校時代の友は一生の友って言うからな」
リビングで新聞をめくりながら、家族の会話を聞いていた父親が言った。
「さすがお父さん、話がわかるね」
ゆかりは、そう言って笑ったが、一瞬、ふと考えてしまっていた。
本当に、アヤと「一生の友」でいられるのだろうか・・・・

【第１６話】藤島綾香編・９

（藤島綾香編・９）

お盆時期、病院の中は一日中、人の気配が無くなり静けさに満たされる。
重病患者以外、殆どの患者は外泊許可を得て家に帰るのだ。
重病患者は殆ど病室から出歩かない為、人の気配が途絶える。
綾香は、一日だけ外泊して、病院へ戻らなくてはならなかった。
母が病院までタクシーで付き添って来た。
薄暗いロビーを抜けると、エレベーターの前には高校生らしい男の子達が３人待っていた。
二人は完全な茶髪、残りの一人も黒っぽい髪だが完全な黒髪では無かった。
勿論、それは、潮焼けと言っても通用する程度だったが。
「肺気胸ってなんだよ？」
「知らねぇよ。俺に訊くな」
「岡本、タバコ吸わなかったよな」
「俺も、吸ってないぜ」
「関係あんの？」
「さぁ・・・」
３人の男の子達はガヤガヤとそんな話をしていた。
アロハシャツや派手なプリントのＴシャツを着ている。
少々ガラが悪そうだが、何処の学校だろう。
まぁ、夏休み中だし最近はこんなものか・・・・
綾香の母親は３人の男の子達を見て、少しだけそんな事を思っていた。
一階にエレベーターが着いて扉が開いた。
茶髪の一人がサッと中へ入ったかと思うと、

「どうぞ」
綾香とその母親を促した。
どうやら、先に入った彼は、待ち人の人数を考えて「開く」の延長ボタンを押していたようだった。
外で待っていた、二人も綾香達を先に促したので、二人は小さく会釈してエレベーターに乗り込んだ。
全員エレベーターに乗り込んだ時
「お前、外の矢印ボタンでも開放延長できるんだぜ」
やや黒髪の男の子が茶髪の彼に言った。
「マジ？・・・先に言ってくれよ、ヒロト」
茶髪の彼は、テレ笑いを浮かべ、もう一人も笑った。
その光景に綾香とその母親も笑いを堪えるのが大変だった。
3人の男の子達も3階で降りるようだったが、勿論、綾香と母親を先に降ろしてくれた。

「ほんと、人は見かけによらないのね」
病室の近くまで来て、母親が笑って言った。
「そんな事言ったら悪いよ」
綾香も少し笑っていた。
「窓開けないと、ここは暑いわね」
母は病室に入ると、直ぐに窓を開けて「ああ、いい風」
お年よりの患者などは、裏山から吹く風が寒く感じるらしく、何時もは気を使っている。
しかし、同室に他の患者がいない今は、好きなだけ窓を開けられるのだ。
「夜、寝苦しくない？」
「もう慣れた」
綾香が笑うと、母親も笑った。
「お母さん、お店戻って。お父さん、一人できっと大変よ」
綾香は気を使ってそう言った。

「そうね・・・・」
綾香の母親は、少し笑って、それでも、それから２０分は綾香のベッドの横に腰掛けていた。
４人部屋にいるのは自分一人、そんな病室はこの時期珍しくない。
母が帰って行くと、再び病室は静けさに包まれた。
日中だと言うのに、看護婦の歩く、パタパタという足音が、やけに廊下で響いている。
「来年、百武彗星が・・・」
何となく点けっぱなしのテレビから、そんな言葉が流れていた。
「ヤッホ！」
母親が帰って間も無く、病室の入り口から、ゆかりの笑顔が覗いていた。

【第17話】藤島綾香編・10

（藤島綾香編・10）

夏休みも終わりを告げ、9月に入ったにも関わらず、夕暮れの裏山では、蜩の鳴き声が響き渡り喧騒に満ちている。
裏山から吹く夕方の風は、大分涼しくなっていた。
蝉は寒くないのかな？などと、綾香は思ったりした。
自分はパジャマの上にカーデガンを羽織っていたからだ。
彼女は、一階の渡り廊下から見える、緑の木々を眺めながら、降りしきるセミ時雨に呑み込まれるように、ギシギシと軋む床を踏みしめてゆっくりと歩いていた。
歩く場合は、出来るだけゆっくり、そして、少し散歩などをする場合は頻繁に腰掛けて休憩するようにと、担当医師から言われていた。

向かい側から車椅子を押した男性が来た。
右足にギブスを着けている為、重さが釣り合わないのか、右に左にギクシャクと蛇行している。
それとも入院して間もないのだろうか。
一階の渡り廊下は狭い為、綾香は一度立ち止まって隅へ避けようとしたが、車椅子が蛇行している為、どちらに避けようか戸惑ってしまう。
何とか上手く避けると、車椅子の男が一礼して
「蝉、うるさいね」
と、微笑んだ。
綾香も微笑んで
「そうですね」
車椅子が自分を通り過ぎてから、彼女は再び歩き出した。

本館の階段前の踊り場に出ると、幾つかの自動販売機が在る。
外来の待合ロビー近くには、もっと色々な自販機があるが、ここが彼女の病室から一番近いのだ。
綾香は持って来た小銭入れからお金を取り出すと、自販機に入れて、ボタンを押した。
ガコッと小さな音はしたものの、ジュースが落下した感じはしなかった。
少し、怪訝に思いながら取り出し口に手を入れると・・・
やっぱり何もない。
「はぁ・・・・ついてないなぁ・・・・」
綾香は肩を落として溜息をつくと、少し考え込んで、自販機を叩いた。
重い自販機は、綾香の非力な力で叩いても揺すっても、びくともしない。
「もう・・・・また、お金取りに戻らなくちゃ・・・」
中味を確かめずに持って来た小銭入れには、１円と５円玉を足しても１８５円しか入ってなかったのだ。
「神様って不公平だな。何も、今のあたしにこんな事しなくても・・・」
さすがの綾香もつい独り、愚痴が出てしまう。
タイミングよくゆかりでも来ないかな、などと辺りを見回しても、そう都合よくは行かない。
無駄な努力と判っていても、彼女は再び自販機を叩く。
やはり、仁王立ちした自販機はびくともしない・・・・
それでも、どうにか、ちょっとくらい揺れないかと、次第に夢中になる。
日曜日の病院内は、薄暗く閑散として、小さな窓から差し込む西日だけが少し眩しかった。
「どうしたの？」

綾香はいきなり死角から声を掛けられて、ビックリしたのだった。

【第１８話】藤島綾香編・１１

（藤島綾香編・１１）

「ヒロトくんとは、その後どうなの？」
ゆかりが言った。
綾香とゆかりは休憩ロビーのベンチに並んで腰掛けていた。
「うん。今度、バイクで海に連れて行ってくれるって」
「いいなぁ。バイクかぁ」
ゆかりは、そう言って缶コーヒーをグイッと飲んで
「あたしも、バイクに乗れる彼が欲しい」
「なによ、裕一くんがいるじゃない」
「だって、原付すら持ってないんだよアイツ」
「優しいからいいじゃない」
「ま、今はアレで我慢しとくか」
ゆかりが笑うと、
「裕一くん、かわいそう」と、綾香も笑った。

最近綾香の体調が良い様子で、ゆかりも安心している。
相変わらず白い肌も、ほんのりピンク色で血色もよく感じる。
やはり、精神的なものも、十分体調を左右するのだ。
休憩ロビーの窓から差し込む陽射しも、夏が終わったにも関わらず、最近やたらと明るく感じていた。

そうだ、アヤとは一生の友達なんだ。
ぜったいそうだ。
ゆかりは心の中で呟いた。

「でもさぁ、最初怖くなかった？ヒロトくん」
「別に」と真顔の後に
「でも、チンピラかと思った」
綾香が笑って言うと、ゆかりが吹き出した。
「でも、最初から親切だったよ」
と、綾香は付け加えた。
「学ランって、いいよね。裕一なんてブレザーだし、ちょっと間違えるとリーマンのオッサンに見える」
今度は綾香が吹き出して笑った。
「ねぇ、アヤ。制服デートしなよ」
「制服は家だよ」
「あたしが、持って来てあげるよ」
綾香は、少しだけ考えて、笑顔で肯いた。
「勝負下着も着ける？」
ゆかりが笑って言うと
「バカ！」

「じゃぁ、家には電話入れておいてね。明日アヤん家に行ってくる」
ゆかりはそう言って、綾香に見送られながら病院を後にした。
穏やかな日々が続いた。
これから春が始まるような、季節を逆行した穏やか日々だった。
ゆかりは、出きるだけ綾香の彼とバッティングしない時間を選んで彼女を見舞った。
彼女は、綾香の病状が回復に向っていると思っていた。
必ず元気になると、そう信じていた。

【第１９話】～藤島綾香編・完結

秋晴れの日が続いていた。
日中は学ランを脱いで、みんなＴシャツなどで授業を受けている。
「しかしお前ら、だらしない格好してんな」
などと言う先生も、別にダメだとは言わない。

中間考査の試験が始まる頃、僕は綾香に会いに行く時間が取れなくなっていた。
今回の試験はどうしても良い点数を取る必要があった。
一学期に赤点を取ってしまった科目を、二学期に挽回すると担当教師に約束して、前回の追試や補習を全て無くしてもらった為だ。
そんな事がなければ、高校の中間試験日くらいで、彼女に会いに行かないわけが無い。
そして、こんな事なら夏の試験休みに補習を受けていれば良かったと後悔した。

（十月二十三日）
ようやく中間試験が終了した日、僕は六日ぶりに綾香に会いに病院へ行った。
六日ぶりに彼女に会えると思うと、薄暗い古びた玄関も、板張りの軋む渡り廊下も軽やかに歩いた。
エレベーターなど待つ時間が惜しい。
三階までの階段を一段飛ばしで一気に駆け上がった。
いさみ立つ気持ちを押さえて彼女の病室を覗くと、何時もの窓際のベッドは空きになっていた。
シーツは取り去られ、薄いベージュ色の上掛け布団がきれいに三つ折りにたたんである。

僕は、思わず病室の部屋番号を確認したが、部屋は間違っていない。
しかし、病室の入り口にある名前のプレートにも、彼女の名前は無かった。
もしかして、退院したのだろうか。
最近の彼女の、明るい様子の一面しか見ていなかった僕は、そんな能天気な考えしか思い浮かばなかった。

内科病棟のナースステーションに行き、近くにいた看護婦さんに尋ねた。
「どういったご関係の方ですか？」
その看護婦の表情は硬かった。
「いや、友達ですけど・・・・」
僕は、ボソリと言った。
すると、後ろにいた、見覚えのある看護婦が、立ち上がって
「あなた、いつも彼女のお見舞いに来ていた子ね・・・・まだ、聞いてなかったの・・・・・」
よく見ると、ナースキャップの角に紺色の二本線。婦長だ。
しかし、彼女の表情も硬い。
少しだけ優しい笑顔が、僕に不安を過ぎらせた。
点滴の容器を吊り下げたスタンドを押しながら歩く老人が、僕の後ろを通り過ぎて行った。
こうして話している間にも、数人の看護士がステーションを慌ただしく出入りしている。
僕は、不安に後押しされるように言葉を発した。
「あの・・・藤島綾香さんは・・・・」

（藤島綾香編）完結

その日、ゆかりは走っていた。
うろこ雲が天高く浮かぶような、爽やかな秋晴れの日だった。
普段、あまり運動と言うものをしない彼女は、去年の一年分は走ったかもしれない。
病院に着いて、古い階段を駆け上がるとき、息が苦しくて心臓が悲鳴を上げていた。
それでもゆかりは止まるわけにはいかなかった。
「あ、廊下は走らないで」
すれ違った看護士の声など耳に入らなかった。
当然、エレベーターなんて待っている気分じゃない。
しかし階段を上る足が異常に重い。まるで自分の足じゃないようだった。
この病院は、こんなに大きかっただろうか・・・・
この階段は、こんなに長かった？・・・・
三階に到達した最後の段で、ゆかりは躓いてしまい、転びそうになって前のめりに膝を着いた。
「痛っ」
スカートだった為、擦りむいた膝から血が滲んでいたが、ゆかりは直ぐに立ち上がって再び走った。
ナースステーションに隣接するＩＣＵ（集中治療室）の前に彼女が辿り着いた時、そのベッドに横たわる少女の身体には、白い布だけが掛けられていた。
その少女の身体は、やたらと小さく見えた。
ゆかりは大きく肩で息をしながら、らその光景を見つめていた。
酸欠気味の彼女の脳細胞は、視覚から入った情報を現実なのか幻覚なのか判断するのに時間がかかった。
一度は取り付けたであろう人工呼吸器は取り去られ、バイタルサインを示す機器類の電源は、全て落とされていた。

ベッドサイドにいる綾香の両親の姿は、しばらくの間、ゆかりの目には入らなかった。

（藤島綾香編ＥＮＤ・

本編につづく・・・）

【第２０話】

・・・・・・・・・・・・・

彼女は既に、この世にはいなかった。

六日前に見たあの笑顔はもう存在しない・・・・・

全てが幻のように消えて無くなっていた。

人の死は、こんなにも簡単に訪れるのか・・・・・

よく、大切な人や、気持ちの通じ合う人がこの世を去る時、虫の知らせがあったり、枕元に立たれたり、皿が不吉に割れたりする話を聞いたことがある。

僕はそんな話を少しだけ信じていた。

それなのに、現実は違っていた。

大切な人は、呆気なく自分の知らぬ間にこの世を去っていた。

その瞬間も僕は、学校で友達とくだらない話で盛り上がり、笑い転げていたのだ。

彼女の死の瞬間に、僕は、涙を流せなかったのだ。

彼女は未だ１６歳だった。普通の人が仮に８０歳まで生きるとしても、その５分の１しか生きる事が出来なかった。

外へ出て駐輪場まで行き、バイクに跨った僕は、ヘルメットを被ったままその場から動く事が出来なかった。

止め処なく溢れ出る涙で、この世の全ての景色が歪んでいた。

その時、僕の心の時間が止まったような気がした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

１２月５日に初雪が降った。
例年の初雪は、申し訳程度に降るものだが、今年は違っていて、いきなりの本降りだった。
二学期の期末試験が始まった日でもあった。
中間試験の最終日以来、僕の心は蝉の抜け殻のように空っぽで何も無く、体はドス黒い鉛のように重く沈んで、全ての気力を奪い去った。
このまま地球の奥底まで深く沈んで消えてしまいたかった。
岡本や晃一、坂木に正広、友人達はみな僕を元気付けてくれた。
近くの女子商業高校との合同コンパにも呼んでくれた。
青臭く、若い心は柔軟で強いのか・・・・・・
僕は少しずつ元気を取り戻す自分に、怨嗟の声が聞こえる思いだった。

初日の試験も終わり、校門前に続く直線の通りを歩いていると、一人の女の子が歩道に佇んでいるのが見えた。
「あれ、女子高の制服じゃない」
僕の斜め後を歩いていた岡本が言った。
県立女子高の制服だ。
綾香の学校の制服・・・・・・
バーバリーチェックのマフラーを首に巻き、お揃いの模様の傘を片手に、一人佇む女子高生を、工業高校の男子生徒達が振り返る。
傘に白く積もった雪の量が、彼女の佇んだ時間を示している。
僕も、思わずその制服を見つめた・・・　綾香もこの制服を着ていたのだ。
「皆川さん」
僕が側を通った時、彼女は僕の名前を呼んだ。
「はっ、はい。そうだけど・・・・」
僕は、訳が判らず立ち止まったが、よく見ると、以前一度だけ会った事のある、綾香の友達のゆかりだった。

「あ、ゆかりちゃん・・・・」
彼女は、髪型が以前と違っていた。
かなり長かったはずの黒髪は、ショートカットへと変っていた。
「お久しぶりです」
垂直に持っていた傘を、軽く右肩にかけて彼女が笑った。
僕は、何を言葉にすればよいのか解らなかった。
どうしてこんな所にいるのか訊こうとしても、言葉が出ない。
彼女は、学生カバンとは別に持っていた、布製のトートバックから小さな箱を取り出した。
白地に緑のギンガムチェックの包装紙に包まれて、ワインレッドのリボンが掛けられている。
「アヤからです」
そう言って、彼女は手に持った包みを差し出した。
「・・・・・」
最初は、彼女の言っている言葉の意味すら理解不能だった。
「アヤ」とは綾香の事だと気が付くのに何秒かかったのか・・・
「なに・・・・？」
僕は、彼女に尋ねた。
「誕生日プレゼントです」
彼女の小さな唇には少しの笑みも無い。
「本当に、綾香から・・・」
僕の頭の中は、降り注ぐ雪に汚染されたかのように真っ白で、思考能力を失っているようだった。
「彼女が買ったものです。もし、何かあった時は・・・そう頼まれていました」
ゆかりの大きな目には、今にも涙が零れそうで、震えた唇が少しだけ微笑んだ。
そう、もう一つ・・・・　今日１２月５日は僕の１８才の誕生日だった。

【第２０話】（後書き）

次回【第２１話】最終回です。

最終話～エピローグ

僕はそっと、その包みを手にした。
受け取る手が小さく震えているのが自分でも判った。
瞬きをした瞬間、僕の頬に液体の雫が一筋流れるのを感じた。
ゆかりは、僕の涙を見た為か、堪えていた何かが外れたように手を口に当てて下を向くと、激しく咽び泣いた。
「忘れないであげてね・・・・・」
「忘れないよ・・・・」
僕の胸にもたげた彼女の頭を、自分の涙を堪えながら、そっと手で撫でる事しか出来ない自分がもどかしく、ただその場に佇むしかなかった。
綾香は生前に僕の誕生日プレゼントを用意したと言うのか・・・・・
それじゃ、彼女は、何時自分が死んでもいい準備をしていたのか・・・・
あの寂しげな海色の瞳は、自分の命の短さを知っていたのだろうか。
「あんなに泣いたのに・・・・・涙っていくらでも出るんだね」
顔を上げたゆかりが、少しだけ微笑んで言った。
全てが静止するほどに真っ白な景色の中、歩き去るゆかりの後ろ姿を、僕は何時までも見つめていた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「皆川！」

岡本の声で、白い景色だった校門前の通りが現実の風景に戻った。
そこは、春の陽射しで漲っていた。
僕はどれくらいの間、ここに佇んでいたのだろう。
時計を見ると、昇降口を出てから何分も経ってはいなかった。
「これからみんなで半島まで走りに行くけど、お前も行かない。いわゆる卒業走りって事で」
卒業証書の筒とアルバムを片手に、後ろから走って来た岡本が、勢い良く僕の肩を掴んで声を掛けて来た。
地元の半島までバイクで走りに行こうと言うのだ。
「行こうぜ、ヒロト」
坂木と正広もその後ろから自転車に乗って、声を掛けてきた。
頬に流れた雫の跡を確かめるように、片手で拭った僕は、
「いや、今日は止めておくよ」
と、振り返りながら明るく応えた。
もう、逃げられはしないだろう。
今この瞬間に、ようやく決心が着いたようだ。
あの丘の向こうの、墓石の下に静かに眠る、彼女に会いに行くという事を・・・・・・
もしかしたら、この時、僕の心の時間が再び動き出したのかもしれない。
綾香が僕にくれたプレゼント。それは、腕時計だった。
ブランド物の高級なものなどではない。輸入雑貨店に売っているような、デザイン重視のものだ。
彼女は自分の時が止まる事を知っていた。だから、その後の刻む時間を、僕に託したのかもしれない。

両耳を貫くようなアフターバーナーの轟音に、思わず僕達が見上げた校舎の向こうには、練習を再開したブルーインパルスの機影が、春寒の大空を切り裂くように、一直線に上昇して行くのが見えた。

【エピローグ】

西の空が真っ赤に染まっていた。
彼方に浮かぶ雲の波も、その下に連なる街並みも、全てが茜色の光に染まり、輝いていた。
小高い丘を越えて、更に連なる丘の上に大きな霊園がある。
何区画にも分かれた巨大な迷路のような霊園の一角、少し傾斜したその上は、僕にとって特別な場所だ。
僕は、初めて来たにも拘らず、この広大な霊園の中を迷う事無く辿り着く事ができた。
その墓石は、夕日に照らされて黄金色に輝いていた。
「藤島家之墓」・・・・彼女は、ここへ両親よりも、祖父母よりも早く入ってしまった。
持って来た線香の束に、ジッポライターで火を着けて香受けに置いた。
白い煙が立ち込める中で僕はそっと両手を合わせた。
再び想い出がフラッシュバックすると、閉じた瞼を涙がこじ開けて溢れ出てしまった。
二度と会えないとしても、何処か自分の知らない遠くで生きていてくれる事と、この世に存在しない事は、あまりにも違いすぎる。
その違いは、人の死を目の当りにして始めて実感するのだ。
僕は、ポケットから学ランの第二ボタンを取り出し、石碑の壇の上に置いた。
今日、三月二十三日は綾香の１７歳の誕生日だった。
これは、後で骨壷にこっそり入れてしまおう。

悲しみは薄れ、やがては思い出だけが残るだろう。
再び、この場所へ来る事があるかは判らない。
それでも、きっと僕は、他の誰に恋をしても、この先家族をもって年老いていったとしても、藤島綾香の事は一生忘れないと思う。
僕はこの先、彼女と同じくらい、人を好きになることができるのだろうか・・・・

辺りが夕闇に包まれ、上空に星々が姿を現す頃、北極星の横には、彼女と一緒に見る約束をした、ほうき星の青白く透き通った光が、一筋の長い尾を引いていた。

海色の瞳

ＥＮＤ

最終話～エピローグ（後書き）

あとがき

大人になっても忘れる事の出来ない思い出、忘れられない人はいますか？

このお話はそんな物語です。

最後まで読んでくださった方々、少しでも読んでくださった方々にも大変感謝いたします。未熟な作品ではありますが、ご意見・ご感想などをいただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0677b/

海色の瞳

2010年10月8日15時31分発行